

第1回 カナダってどんな国？

塩安 九十九

二〇一四年四月からカナダ最大の都市トロントでしばらく暮らしている中で、LGBTコミュニティの様々な側面を見ることができました。その体験を六回に分けてレポートさせて頂きます。とはいえ、英語もまだまだままならない状態ですので詳しい事情がわかっていない部分もあり、現時点での報告となります。ところで、LGBTとはゲイ、レズビアン、バイセクシユアル、トランスジェンダーの頭文字を合わせた略語です。異性愛者ではない人や生まれた時の性別を変えたり性別にとらわれ

ずに生きる人の総称でもあります。単に「クィア」と言うこともあります。少しだけ私についてですが、トランスジェンダーの当事者として一五年間、大阪のLGBTコミュニティに関わってきました。当事者向けのピアサポートやイベント、人権条例や施策にLGBTを入れるように行政へ働きかけたり、LGBTの子どもたちへのいじめを防ぐための教育現場での講演活動、情報発信のための映像制作、ろう者でLGBTの人たちのための支援リバティおおさか等での他のマイノリ

ティとのネットワーク形成などを行ってきました。しかし「同性が好きなのは個人の自由だが、差別されても自己責任」や「女性が男装するのはいいが、男性が女装するのは生理的に受け付けない」など、「性的指向（誰を好きになるか）や性的自認（自分が自覚している性別）」が「人権」の問題であることが、なかなか日本では伝わらないもどかしさを感じてきました。そもそも日本では「人権」という概念そのものが人々に根付いていないように感じます。そうした活動をする中で、LGBT

Tの人権が確立している海外の状況や文化背景が知りたいと思うようになっていきました。私がカナダに来た目的は、英語の習得とLGBTの文化を知るためでした。

今回の連載の目的は「カナダの何が日本に活かせるか」です。カナダと日本はとても違うのでそのまま輸入することはできませんが、ヒントになることを考えたいと思います。

人権意識が高く、LGBTフレンドリーな都市トロントですが、そうした文化が育つ背景には何があるのでしょうか。今回は簡単にカナダの紹介をしたいと思います。カナダの面積は日本の二七倍で世界第二位の広い国です。人口は日本の四分の一、三四〇〇万人

になっています。移民が多いので地下鉄に乗っても聞こえてくる言語は英語半分、他のどこかの国の言葉半分という感じで世界各国から人が来ているのを感じます。カナダの公用語は英語とフランス語なので品物のパッケージも二言語併記されています。テレビをつけても多言語の番組をやっている、こうした言語的多様性があらゆる多様性を保証する基盤になっているのかもしれない。



写真① 中央にゲイ向けの保険会社の広告

です。八〇%の人が都市に暮らしており、大きな都市のひとつであるトロントの人口は二六〇万人で、郊外もあわせると六〇〇万人。ちなみに大阪府は二七〇万人、府内を含めると八九〇万人です。大阪の方が一回り大きいですが、全体では白人の割合が八割ぐらいですが、都市部ではその数は半分以下

カナダと言えば自然が豊か！ 中心部は梅田のように高層ビルが立ち並んでいます。すぐ近くの住宅地には木がたくさん植えられていて芝生もあり、リスが走り回っているなど、とても緑豊かな街です。平日の公園に行くところ、あんまり急いでセカセカ暮らしている感じではありません。労働時間も

日本よりは短いようで、毎日友だちや家族に会えたりするので人との繋がりが人や過ごし方も日本とだいぶ違ってくると思います。働いている人たちはのんびりしていたり接客態度が日本ほど良いわけではないので、客としてはイラッとする時もありますが、労働者としてはゆつたりと仕事ができていいかもしれません。人生全体の雰囲気がつたりしているというか、例えば大学を出てすぐ就職しないとか、三〇歳ぐらいまでプラプラしているとか、すぐに何かしらないといけない！という感じではありません。「好きなことをちやんとやんなさい」「人生一度きりなんだからちゃんと楽しもう」というような雰囲気が感じられます。また「Who cares?」「Who knows?」と言うのをけっこう耳にしますが「誰も気にせえへんわ」みたいな感じで、それは無関

心・無頓着というよりは「大丈夫、そんなに気にせんでも」と言うような細かいことを気にしない大らかさを感じます。

しかし会議などでは時間内に全員がばばーつと意見言うだけ言ってさっさと終わるといような合理的な一面もあります。細かいことを気にしたり、言外の空気を読むということがあまりない代わりに、問題解決に直結したストリートで合理的な話し合いの文化があるようです。

あと、ハグの文化です。挨拶の時や別れ際に握手かハグをするのが普通です。私は最初は及び腰であんまりしたくなかったんですが最近はどう慣れてきてなんだかほっこりするということか、慣れてみるといい文化かもしれないな、と感じはじめています。

カナダの冬は厳しいので（真冬はマイ

ナス二〇度など）夏の間は様々なイベントをここぞとばかりやっています。毎週のように道路を歩行者天国にして色々な出店が出るストリートフェスティバルやコンサート、北の方の農家の人たちが自家製のものを町に売りに来るファーマーズマーケット、図書館を使ったコミックマーケット、美術館を夜に開放してライブをしたりお酒を飲みながら芸術鑑賞ができる催し等とても賑やかになります。

トロントの移動手段は地下鉄とバスと路面電車で、アクセスビリティの面では車いすが利用できる地下鉄の駅が半分ぐらいいしありませんが、そのかわり車いす専用のバスが走っています。

明らかに日本と違っていいなと思ったのは、女性があらゆる分野で活躍することが普通になっていることです。バスの運転手、工事現場、警察官、

消防士、テレビで専門家が議論する場でも必ず女性が半分出演しています。

ほとんどのスーパーには出口に寄付用の大きな箱が置いてあり、食べ物や日用品などを気軽に寄付できます。そ

の箱はフードバンクに回収され、食べ

物が必要な施設や人々に配分されます。街ではホームレスの人を見かけたり、麻薬の匂いがする所があったりします。町のいたるところにある教会がそういう人たちへの支援を担っていたり、ホームレスの支援を専門とする福祉施設があったり、日本とはそういう支援の厚みが違うと感じます。逆に言うところそうした支援が必要な人が多いとも言えます。

いろんな国から人が来ているので各国の料理が食べられるのがトロントの良いところです。チャイナタウン、コリアンタウン、グリーンクタウンなど特色のある町もあるので他文化の雰囲気を感じることもできます。先日あるレストランに行ったのですが、そこで働いているのはほとんどがろう者で客も注文する時は手話を使うというユニー



写真② オタワ市の旅行の広告

クなレストランでした。

毎年六月にLGBTのプライドパレードが大規模に行われます。この時期になると写真のようなLGBT向けの広告が街に増えます。写真①は地下鉄のプラットホームにあったゲイ向けの保険会社の広告です。写真②はオタワ市が旅行の広告をゲイ向けに出していました。町に堂々と同性カップルの写真が並ぶのを見るのは、それだけで気持ち力が勇気づけられるものです。少しカナダという国をイメージしてもらいたいです。次回は広範囲におよぶLGBTカルチャーを分野ごとに説明したいと思います。

(しおやす・つくも)

第2回

LGBTカルチャーいろいろ

塩安 九十九

今回は大まかなLGBTカルチャーを分野ごとに紹介したいと思います。

というのも、トロントのLGBTカルチャーの幅広さはコミュニティの基盤の強さを示すものでもあると思うからです。たとえば、私が日本で情報発信のためにLGBTのインタビュー映像を作る時にどんなことが必要になるかというと、まず自分のセクシュアリティを理解していてそれを語り慣れている、不特定多数の人に顔出しでカムアウトできる人を探す必要があります。その人は映像公開後に負うかもしれな

いリスクに耐えられるような精神的、

人間関係的、生活的基盤がしっかりしていて、このLGBTによるLGBTのための情報発信にどんな意味があるかを理解しており、協力したいという仲間や社会に貢献する気持ちを持っている人です。こういった人が作り上げられるためには、LGBTに関する正しい知識や、自己肯定感、他のLGBTと語り合える場や繋がり、カムアウト後に攻撃されても耐えうる精神的強さや知恵の獲得、相談できる団体や友人関係、所謂コミュニティという基盤

などが必要となります。

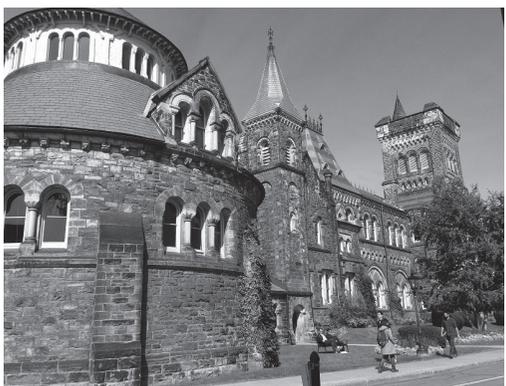
トロントでは多くの人がカムアウトして生活しており、次に紹介するような様々な分野で活動／活躍しています。それが意味することはLGBTとして健康に生きられる分厚い基盤があるということに他なりません。以下に紹介する以外にもまだまだたくさんあると思いますが、私が知っている分野をあげていきます。

まずはLGBT映画祭です（Inside Out・LGBT Film Festival）。パレードの一カ月前五月末に一日間にわた

って七〇プログラム（！）を上映していました。映画館も大きな所で国際映画祭をする会場と同じ場所です。三〇四〇〇座席あるような大きな会場三つで同時上映していました。七〇プログラム全て観たい気持ちでしたがお金もかかるので九つに絞って観に行きました。小さい子どもがいる家族向けの無

料プログラムの回もあり、会場にはゲイカップルやレズビアンカップルが子どもを連れて来ていてトロントに来たなーと実感を持ったイベントでした。小さな町のギャラリーでLGBTのアーティストが個展をするのはよくあることですが、それだけではなく国立美術館のような所でもLGBTやクィアのアーティストの企画展やイベントが行われています。ライオン大学の美術館では「クィアの可視性」という写真展と映像展をやっていました。たとえば一九七〇〜八〇年代のゲイリベレーションの時の写真の展示、南アフリカなどで活動しているLGBTの人たちのポートレートなどです。とても印象に残っているのが、FTM（女から男）のトランスジェンダーの人がどうやって性を変えていったかを展示物が表現していたことです。例えば注射

器が箱にたくさん入っていたり、胸を取り除く手術をした時の領収書や汗まみれのコルセットの展示、男性ホルモンの注射を一週間に一度打っていく体の変化を四八週間に渡って写真で追うというなど、面白い試みもしていました。そういった性別移行の過程が美術展になっているのが衝撃的でした。



写真① トロント大学にはクィアの学問専攻がある。

写真だけではなく映像作品も多数紹介されていました。なんとYoutube上の作品でした！美術館にYoutubeが展示されているのは不思議な感じがします。印象に残った動画のひとつは、ドラグクィーン（派手な女装をした主に男性）のパフォーマンスとしてリップシンクというクチャパクで歌う演出が有名ですが、その作品はアーティスト（ここではビヨンセ）のビデオクリップを真似た上で合成して作っており演技、編集技術ともに質の高いものでし

た。(下記で)覧になれます。

【Countdown (Snuggie Version)】
<https://www.youtube.com/watch?v=6GohpYK5Y3g>

LGBTによって作られたLGBTのための劇場もあります。(Buddies in Bad Times Theatre) (LGBT以外のイベントもします。)様々なLGBT関連のイベントをやっており、LGBTの十代の若者を支援するプログラムと共同で発表の場の提供もしています。また、基本的にゲイタウンと言われている「ビレッジ」という地域の多くのお店には、LGBTのシンボルマークであるレインボアのシールが貼ってあります。バー・クラブだけではなくカフェ・レストラン・雑貨屋や普通のお店などもLGBTの人たちが経営していたりするのでLGBTフレンドリーな場所はたくさんあります。

Alliance of the Dead) と同じ団体で、動画も多数作っており、例えばレディ・ガガの Born this way を手話で歌っている動画を下記で)覧になれます。
【Born This Way (by Lady Gaga) ASL】 <https://www.youtube.com/watch?v=Qdwl8whuXxw>

LGBT専用のニュースやイベントを発信するメディアで一番の大手はエクストラ (Extra) です。毎週月曜



写真② トロント大学が所蔵するLGBTの歴史的资料。奥にあるのがアーニー・スプリングルの自筆サイン入りポスター。

学際的な分野も興味深いです。カナダ・レズビアン & ゲイ史料館 (Canadian Lesbian & Gay Archives) はLGBTの歴史的な資料を保管しています。一九七〇年代のゲイリベレーションの時の歴史的な写真であったり、昔の小説、ポルノなども含めて様々なものが保管されています。トロント大学 (写真①) でもクイアの学問専攻があったり、資料を保管する倉庫があります。先日トロント大学が所蔵するLGBTの歴史的なお宝資料を皆で見ようという会がありました。

(写真②) 奥の方にあるのがアーニー・スプリングルの自筆サイン入りポスターです。こうした歴史の積み重ねを保管したり研究することが文化を形成する上で大事だと感じました。

様々な学会も開かれていて、ジャージビジョン (Jer's Vision) という団日に発刊される新聞は約四〇ページあり、政治、文化、イベント、サポート、LGBTの人たちのビジネスなど様々な情報が載っています。もちろんウェブサイトもあってたくさん動画ニュースやレポートも見ることが出来ます。また、普通にテレビを見ているトークショーでLGBTについての話が出てきたり、ドラマにLGBTの役が自然に盛り込まれていたり、一般のメディアの中でもLGBTが出てくるのは当たり前になっているように感じます。

最後に、日本にはあまりなくてカナダには欠かせないものとして教会があります。しかしカナダ人のクリスチャンでも教会に行く習慣はだいぶ廃れているそうです。町にはレインボーシールが貼ってあるLGBTフレンドリーな教会が多数見られます。メトロポリ

体のセクシュアルマイノリティ支援専門家のための学会に参加しました。学校への反差別・いじめ防止のワークショップの提供やコミュニティ支援の専門家の育成、若者の支援などを行っている団体です。参加者はLGBTの当事者を含めた専門家の人たちでした。専門家がかつLGBT当事者の人も多かったのが印象的でした。分科会数は二日間約五〇という充実ぶりです。ここで気が付いたことは基本的にはLGB (性的指向) のことはすでに一般サービスの対応内に含まれているので、今はトランスジェンダーの問題、例えば就職差別や学校でのいじめ等が取り組むべき急務と認識されているようにでした。また、ろうのLGBTの人からコミュニティの内外での活発な活動の報告もありました。ろう者オンタリオ・レインボー同盟 (Ontario Rainbow

タン・コミュニティ教会 (Metropolitan Community Church of Toronto) はLGBTの教会としてトロントで一番人気です。毎週日曜日に行われるミサは参加型コンサートのようでも楽しい雰囲気です。クリスチャンのLGBTの人々が友だちや家族と共に集い、いつも一五〇人以上は参加しているようです。すごく感動的な合唱の後に寄付のための籠がまわってきて、参加者はけっこう寄付を入れています。コミュニティに参加している恩恵を感じているからこそ寄付をするのだと思います。

今回はLGBT支援のためのコミュニティ、自助グループや支援プログラムが提供されているような場所についての報告に入りたいと思います。

(しおやす・つくも)

第3回 「LGBTコミュニティ紹介」(上)

塩安 九十九

今回と次回はトロントのLGBTを底辺から支えてきた自助グループや支援機関について、私が参加した所を中心に紹介します。

519コミュニティセンター

まずはコミュニティの中心的存在で三〇年前からLGBTの活動の拠点となっている、519コミュニティセンター(The 519 Church Street Community Centre・写真①)519というのは住所の番地)。この建物全部がLGBTのコミュニティセンターで、二〇〇人

収容できるホールやたくさんの会議室、職員のオフィスなどが入っています。大きいです。一階にはおしゃれなアートが飾ってあるロビーや受付があり色々なプログラムの申し込みやイベントの問い合わせなどができます。カフェも併設されていて就労支援の場にもなっているそうです。掲示板には様々な催しやグループの宣伝、時にはLGBTシェアハウス入居者募集なども貼ってあります(トロントは単身物件が少なく高家賃のため、シェアハウスに住むことはとても一般的なことで

す)。519の定例ミーティングは、毎週のものや隔週、月一度などの頻度で様々なテーマで行われており、例えばゲイの父親の会、年配のLGBTの読書会、LGBTのゲーマーの会、性的虐待を受けた人の支援グループ、移民の支援グループなど会合の数は毎月百近くにのぼります。また、子どもを持つLGBTが託児のように使っている子ども向けのサーブिसもあります。建物の後ろには大きな公園があつて毎年HIVで亡くなった人の名前が刻まれるモニュメントがあります。

私が毎週参加しているのは、まもなく二〇年目となるミールトランスというプログラムでトランスジェンダーの人のための無料夕食サービスです。毎回四〇〜五〇人の参加があり、余った食事を持って帰ることもできます。トランスジェンダーとは生まれた時の性

別を変えたり、生物学的な性別にとらわれず生きる人のことです。性別を変えることで就職差別にあつたり、学校でいじめられたり、貧困や薬物、自殺が問題となっています。一九九六年に三人のトランスのセックスワーカーが殺害される事件があり、519はその分野での支援が欠如していることに気づきました。ミールトランスは、無料の食事の提供と共に、HIV等のワークショップを組み合わせるなど、コミュニティとの繋がりがや人間関係の形成、生活のための情報提供を目的とした、トランスのための複合的支援プログラムとしてスタートしました。当時これを考案したトランスアクセスプロジェクトは、トランスの人々が従来特に女性用シェルターの利用を禁止されていた状況に働きかけ、行政による施設利用規定の改善に繋がったことで利

用を可能にするなど、トランスの人々の暮らしに大きな影響を与える、社会の基本サービスの変革を起こしてきたそうです。



写真① 519コミュニティセンター

ある日ミールトランスでご飯を食べた後にトランスのプログラムを見直すためのワークショップがあり、皆で議論することがありました。例えば安全な場を作るにはどうしたらいいのか、参加資格がある人は誰か、食べるだけでなく学習会や映画の上映をしようなど色々な話が出ました。普段はご飯を食べてダラダラしているだけの人たちなのに、こういうワークショップになると自分の意見をはっきりと言って、コミュニティの一員としてその行く末をすごく考えているのがわかりました。この場を作る一人のメンバーとして、どういう行動がふさわしいか、どうという責任を負っているのかというの

を一人ひとりが考えているということ、その発言を聞くことではじめて分かって感じしました。その内容は例えば日本でこうした話し合いをする時の運営者などが言うような発言のレベルに近いと思いました。日本ではその場を作る一人としての責任を感じている参加者は少なく、お客さん気分の人が多いのでこうした積極的な話し合いにはならないように感じます。

519は政府の助成金と一般の寄付金で運営されているらしいのですが、その寄付金の集め方もすごいです。毎年六月に行われるプライドパレードに合わせ六日間にわたって後ろの公園を使ったデイスコパーティをするのですが、DJがガンガン音楽を流し、お酒を飲み踊るといってドンチャン騒ぎで、寄付もそこで募ります。毎年三〜四万人の来場があるそうで、六日間の寄付

金の額は三〇〇万円以上！それが519の重要な運営資金の一部になっているとのことでした。

シャーボーン・ヘルスセンター

次に紹介するのは、シャーボーン・ヘルスセンター (Sherbourne Health Centre) (写真②)。これも重要なLGBTコミュニティを支える施設のひとつだと思います。この施設は、ホームレスと移民とLGBT、この三つのカテゴリーを専門的に扱う医療施設です。写真②の手前にあるヘルス・バスは、教会などで炊き出しをする時にホームレスの人たちが無料で健康相談をできるように、医療者を乗せたバスを派遣しているそうです。ここも様々なプログラムを提供しており、例えばLGBTで親の人たちのネットワーク、LGBTのパートナーのための会、LGBT

Tかどうか迷っている人たちの会、四五歳以上のトランス女性の会、トランスジェンダーの人たちが性別移行について学ぶための一週間連続のワークショップ、ストレスを自分でコントロールするための勉強会など充実しています。またトランスジェンダーのケアについてセンター独自でガイドラインを作っています。トランスの人が性別移行をはじめるときに相談する代表的な窓口にもなっているそうです。

センターが力を入れている取り組みでもあるSOY (サポート・アワー・ユースの略) は一四〜二九歳までのLGBTの若者のためのプログラムで、映画上映会をしたり、アートワークショップをしたりなど毎週様々なことをしています。SOYにはいくつか分科会があり、例えば移民の若者のための会、黒人の若者のための会、パフォー

マンス活動をする会、アート系ワークショップの会等があります。プライドパレードの時は街中に一〇個ぐらい特設ステージが作られてコンサート等が催されますが、その中のひとつがこのSOYの若者の発表の場にもなっています。当日の会場の飾りつけやポスター



写真② シャーボーン・ヘルスセンター

ーも皆で手作りするのですが、こうしたクリエイティブな作業って意外と見くびつたらいけないなと思いました。「バナーなんて誰かがパソコンでぱぱっと打ち出せばいいじゃん」と思っていました。皆で作業をしたり何か作り出すという手作業はけっこう充実感や達成感が味わえて、自己肯定感が繋がると感じました (特に英語が話せず自己肯定感が低くなっている私には良い作業でした)。

このSOYの会合ではピザやインド料理などにかしら美味しいご飯がタダで食べれて、しかも交通費の支給があります。経済的な負担なくミーティングに参加でき、しかもご飯も食べられるというのは、贅沢でもありますが安心感が繋がると思いました (私が日本でサポートグループをしていた時も帰りの交通費がないような人はいまし

た)。こういうことでコミュニティにどうにか出てこさせようとする、孤立しないように関係を繋ぎ止めておくという効果もありそうです。LGBTの若者のなかには帰る家が無かったり、職がずつと見つからなかったりなど不安定な状況の人もいるので、そのようななかでこうしたきめ細やかな支援があることは彼らにとって大きな助けになっていると思います。ここに行けば温かい食事が食べられて、友だちと会えて、大人が相談に乗ってくれるという、交通費を持ってない人でも利用できるような場所が日本にもほしいものです。

次回も引き続き当事者グループや支援機関について紹介していきます。

(しおやす・つくも)

第4回 「LGBTQ+」コミュニティ紹介(下)

塩安 九十九

前回に引き続き、トロントのLGBTを底辺から支えてきた自助グループや支援機関について、私が参加した所を中心にご紹介します。

さまざまな支援機関

イーグル (Equality for Gays And Lesbians Everywhere) は同性婚の成立のためのロビイングなどからはじまっている団体で、同性婚が成立した後は教育現場の改革に力を入れてきていました。学校での正しい理解を普及させるために教員研修を行っていて、今

までに三〜四万人を対象に研修をやっているそうです。その他にもヘイトクライムへの法的介入の支援や被害の調査、LGBTの若者の自殺予防のプロジェクト、トランスジェンダーが国境を越えて旅行をする時に注意すべき点をまとめたパンフレットの製作など、多岐にわたる取り組みを行っています。最近ではLGBTのホームレスの若者を支援するためのシェルターを運営しています。小さな軒家で、LGBTのユースであれば誰でも利用でき、食事やインターネット、カウンセ

リングも無料です。行くところのない若者のために新しい家を探す支援や、自殺で友だちや家族を失った人への精神的ケアも行っています。

トロント大学内の性の多様性オフィス (U of T Sexual & Gender Diversity Office) は大学の公式の機関でクィアな学生に向けての情報提供、LGBTの留学生のための集まり、ダンスサークル、性の多様性ワークショップなど様々な活動をしています。学生に限らず一般公開のイベントも行っていて、私は「ジェンダープー」と

いうアートワークショップに参加しました。トランスジェンダーの芸術家主催で色々なジェンダーや社会的なものを表わしたマーク (写真①) を作ってトイレに貼ろうというワークショップでした。こうした芸術系プログラムは普段縛られている固定観念から解放されたり発想を刺激されたりしてとて

も自由な気持ちになりました。トロント大学には、女性とトランスのためのセンター (The Centre for Women and Trans People : 写真②) もあります。ここは学生でなくても利用できます。いつでも使えるキッチンや大きなソファがあったりと、自由にくつろげるようになっていて、インターネットも利用できます。こちらのワークショップは、ストレス対策やセルフボディケア、手話講座やクラフトクラブなど実用的な内容になっています。毎週木曜日には無料のランチ会をやっていて、皆でご飯を作ったり出前で注文したものを食べたりして交流しています。ここでも交通費の支給がある他、本当にお金がなくて困っている人のために予算が組まれており、緊急時の救済としてここから少しお金をも

らったり借りたりもできるようです。フレッド・ビクター・センター (Fred Victor) は、LGBT専門ではなく一般に貧困に暮らす人々のための支援機関で、寄付によって運営されています。一〇〇年以上前に慈善所として始まりましたが、現在では約二〇〇名が暮らす恒久住居となっています。予約なしで誰でも立ち寄れる相談センターやレ



写真① アートワークショップで提案されたマーク



写真② トロント大学内にある女性とトランスのためのセンター

ストランも備えており、食事、避難体息、社会的なつながり、求職情報などを求めて、毎日約八〇〇人が訪れるそうです。十数カ所あるセンターは施設ごとに提供しているサービスも異なります。私が行っている所は民間のハローワークのような雰囲気で、就労支援を主にしており、例えば履歴書の書き方や仕事の探し方などの支援をしています。また移民向けに無料の英語講習会も開かれています。月曜日の一三〇一六時まではトランスジェンダー専用の時間になります。毎週です！無料でキャリアアカウンセリングや日常生活の問題をソーシャルワーカーに相談できますし、ここでも無料のピザが出ます。

第二回（五月号、No.三二六）で少し触れましたが、メトロポリタン・コミュニティ教会のようなLGBTフレンドリーな教会がフレッド・ビクターの

ような役割を果たしている部分も大きいと思います。サンクスギビングやクリスマスなど家族で過ごすイベントの季節になると、教会では無料のコンサートや食事を企画して、孤立しがちな老人・単身者へ参加を呼び掛けています。そうした支援を教会が果たすべき使命として取り組んでいるように感じます。また「クリスマスディナーのための寄付」や「トイレ修理の寄付」など目的ごとに寄付を募るやり方は見習いたいと思いました。

その他に私が活用している社会資源はミートアップ (meetup) です。これはインターネットを使って人と集まるためのサイトで、LGBTというキーワードで検索すると例えば「カミングアウトについて語り合う会」「専門家のLGBTの会」「中東イスラム教徒のレズビアン会」「四〇歳以上の

シングルのゲイの会」など様々な会があることがわかります。グループ登録者が千人を超える「LGBTQAで遊びに行こう！」という会はピクニックや持ち寄りパーティ、スキー旅行などを企画していて私も時々参加しています（全ての集まりに千人全員が来るわけではありません）。「トロント・ポリアモリーの会」こちらも八〇〇人以上の登録があり、毎回活発な議論が交わされるミーティングは刺激的です（ポリアモリーとは複数のパートナーを持つ恋愛スタイルのことです）。

日本との違い

これらのコミュニティ体験から私が感じる日本との違いを六つ上げたいと思います。

(1) 会合に無料の食事がついている。どこかに行けば食べられて、場所によって

は交通費さえも出る。本当にありがたいです。また食べ物系の集まりでは食事を出す人が、ビーガンですか？ベジタリアンですか？アレルギーありますか？宗教上食べられないものがあります？など色々聞いてくれるか、自分で言います。いろんな人がいるという前提なので、食べ物ひとつについても多様性を感じます。

(2) 平日の夜に会合や催しを普通にやっている。毎週ミーティングがあるってすごいと思いませんか。やっぱり平日の夜にできる／毎週できるというのは結局働き方が日本とは違うという結論に行きつきます。コミュニティが暮らしの一部になっているということですね。

(3) コミュニティの雰囲気にお客様感がない。コミュニティを作っているのは自分だという認識を持っているので

「お客様扱いしろ」感がありません。そしてコミュニティに属していると感じ、恩恵を受けていると思うからこそ寄付をする人が多いのだと思います。寄付ができればボランティアなどをして貢献しようと思います。

(4) 紹介した機関のほとんどが政府からの援助や寄付金で運営されていました。給料をもらえる常勤スタッフは一握りで、常勤スタッフ自体が少なくかなりの部分がボランティアで行われているようです。日本でもほとんどがボランティアですが、ボランティアをする人がとても多いこと、ボランティアを気軽にできる敷居の低さ、各自の時間的体力的な余裕が違うと思いました。

(5) イベントに手話通訳が付いている。LGBTコミュニティ内で手話を知っている人が多い。紹介したような機関やグループでは主催者レベルの人は手

話できる人が多いです。ろうの人がLGBTコミュニティにいるのが当たり前になっっているからだと思います。(6) LGBTはそろそろ大丈夫なのでトランスへの支援が必要という認識。人種差別やファーストネーション(先住民)の問題、移民や貧困・薬物、男女差別等、社会問題への認識を持っている人が多いように感じます。カナダで暮らす上では当たり前のことなのかもしれませんが。日本では人権や社会問題について考えること自体が少し特別なこととして捉えられているようにも思います。

今回は二〇〇万人が世界から集まるトロントのプライドパレードについてご紹介します。

(しおやす・つくも)

第5回 プライドパレード

塩安 九十九

パレードを通じて
性の多様性を称賛する

プライドパレードは、元々はLGBTへの差別や弾圧に反対するデモとして始まっていますが、現在では性の多様性を称賛するための祭典のように意味合いが変わってきているようです。パレードは世界各地で行われており、中でもトロントの規模は大きく、例年の参加者は一五〇万人程度ですが今年は一〇〇万人程度だったと聞いています。今年も大阪で行われていたようです。

パレードの参加者数はおよそ六〇〇〇〇人だそうです。ワールドプライドとは三年に一度行われるLGBTパレードのオリンピックのようなもので、各国から有名人を招くなど様々なイベントが催されました。公式ガイドブックは一〇〇ページを超え、催しがたくさんあって選ぶのが大変な程です。約一〇日間関連イベントが行われ、最後の日はパレードです。トランスマーチが金曜日、ダイクマーチが土曜日、プライドパレードが日曜日です。トランスマーチとダイクマーチは政治色が

強く、プラカードを掲げている人も多いです。この二つは登録しなくても当日歩くことができますが、最後のプライドパレードは登録が必要で二五〇団体の登録があったようです。

様々な団体がトラックに飾り付けしたものの（フロート）に人を乗せていたり、人々は自由な衣装（あるいは全裸で）で踊ったり歌ったりしていました。ダンスや楽器演奏をしながら歩いている人もいます（写真①）。LGBTの団体はもちろん、スポンサーである企業も多数フロートを出しています。L

LGBTフレンドリーであることを消費者にアピールするチャンスでもあるか



写真①

らです。また政党、教会などの宗教団体、労働組合、消防署、警察なども組織内にLGBTの会を持っているため参加しています。前回の選挙でオントリオの州知事にレスビアンの人々が就任したため自由党のフロートはとても盛り上がりがありました。四五年前までゲイであることで逮捕していた警察が、いまパレードと一緒に歩いていることは感慨深いことです。

パレードの距離は大阪の地理で考えると縦は淀屋橋から心齋橋、横は御堂筋から四ツ橋筋ぐらいの規模です。この間を閉鎖してストリートフェアをしたりコンサートをしたり、様々な出店も並びます。LGBTの団体のブースはもちろん、関連企業も多く出店しています。中にはトランスジェンダー向けに胸の除去の手術写真を並べて案内するブースまであり驚きました。

私もトランスマーチで参加者として

歩くことができました。本当に多くのトランスジェンダーやその支援者が集まっていた、沿道も人で溢れすい混雑でした。人々は私たちに向かって声援を送ったり、トランスジェンダーの旗を振って応援していて、多様性を肯定し合う雰囲気にとっても勇気づけられ、感動しました。私が撮影したパレードの様子はYoutubeでご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/user/newreamc>

ボランティアの仕組み

ボランティアもいくつかありました。六月号（第三回）で紹介した519の公園でのデイスコイベントではブリーター（トルティーヤに具材を乗せて巻いたメキシコ料理）を売ったり、LGBTの若者のステージ発表をビデオ撮影したり、トランスジェンダーの歴史

や支援グループを紹介する案内所で情報提供をしたりしました(写真②)。

また、ボランティアの仕組みはともシステマチックです。例えば、ボランティア募集の案内では明確にメリットが示されており「ユニークな視点からパレードを楽しむ」「コミュニティの違いを作るのを助ける」「新しい人



写真②

や対応が相手にとって適切かどうかを確認するよう念を押していました。

例えば、誰かと話していて he や she など性別三人称を使うとうとする時、パレードに来る人の中には自分が予測した性別ではない性自認を持っている人もいるかもしれません。見た目だけで決めつけることはできません。自分の思っているジェンダーとは違う呼び名を使われたら不快なものですから、もしある人としてしばらく会話をするような場面があれば、自己紹介をする時に自分が望む性別人稱も伝えること。例えば私が自己紹介する場合は、「こんにちは、塩安です。私は男性人稱の he や him でお願いします。お名前は？」という感じです。こうした細やかな配慮とその理由をそれぞれのボランティアが理解し実行できたら、素晴らしいイベントになると思います。

たちに出会い、素晴らしいチームで働く」「伝達可能な仕事の技術の向上」「519の最大級のファンドレイジングの支援」「LGBTQコミュニティについてさらに学ぶ」「519に貢献したボランティア証明書を受領」など魅力的で、説明会もわかりやすく楽しいものに洗練されています。ボランティア登録後のシフト調整もウェブ上で全てでき、仕事内容の詳細はもちろん、現在のどの部門に何人足りないかなども分かるようになっていきます。また、いつでもどこで何時間働いたかの履歴も後で確認できます。第一回でも触れましたが、トロントの人口は二六〇万人、大阪市は二七〇万人です。このプライドパレードのボランティアはなんと二〇〇〇人！だからシステマチックになるわけですね。

ボランティアトレーニング用の動画が Youtube に配信されており、パレ

ボランティアが職歴に

日本のパレードと違うこととしては、まず地域をあげて観光産業化しているの、とにかく規模が大きく、そのため仕組みもしっかりしているということです。これは様々な人を巻き込みやすくすることでもあると思います。日本でパレードのボランティアをするとすると、人々はあなたがLGBT当事者であると推測するでしょう。しかし規模が大きいとパレードに関わっていてもLGBT当事者であることの意味しない(し、どうでもよい)ので、結果的に協力や参加を得られやすくなるのではないかと思います。

また、パレードを彩る参加団体も政治家・政党のフロート、政治的主張をバナーと掲げている団体、教会なども含めた宗教組織が多数参加していることは、政治色の薄い日本のパレードと

ードの運営体制やボランティアの出席登録方法、緊急時の対応、参加者に何らかのアクセシビリティが必要な場合についてなどが説明されています。この組織の運営体制は、一人名の理事がボランティアで従事しており、その下に一年間の専従職員として七名の有給スタッフ、その下に四五人の有給スタッフの体制で、その他の人たちは全てボランティアで活動に関わっていることでした。また、イベント全体を通して、全ての人に対して敬意を持って接することを心掛けるようにも呼びかけていました。なぜなら、世界中のあらゆる所から皆ここが安全で安心でき、思い通りの自分を表現できる場所だと思ってくるからです。何か判断に迷うことがあったり、自分の対応が相手を傷つけるかもと思うようなことがあれば、進んで問いかけて、その判断

の違いを感じました。また「全裸を楽しむ会」や「包茎にプライドを持つ会」などの人たちが全裸で歩いていたは衝撃的でしたが清々しさも感じました。そして日本と大きく違うことはボランティアが職歴になることです。カナダの履歴書にはボランティアもやってきましたこととして正式に書くことができます。このパレードの週末ボランティアでさえ、いつ何時間どんな仕事をしたという証明書を発行してもらえます。ボランティアが正規の仕事に繋がるチャンスでもあることがモチベーションに繋がっているようです。

最終回はこれまでの報告を踏まえてカナダの何が日本に活かせるかを考えたいと思います。

(しおやす・つくも)

第6回 カナダの何が日本に活かせるか (最終回)

塩安 九十九

カナダと日本の違いを考える

これまでトロントのLGBT支援機関などを紹介してきました。それを踏まえて何が日本に活かせるかをまとめたいと思います。まず私がカナダにあつて日本にないと思うのは(1)わかりやすい多様性。見た目、言語、文化的背景、宗教、性的指向など様々な多様性がビジュアル的にわかりやすいことです。(2)人権意識の高さ。世界中から人が集まっているので文化・価値観など

が混沌としています。お互いに共有しているものが少ないため、違いをお互いに尊重し合つて暮らさなければトラブルばかりになってしまいます。そうなると共に生きるための共通認識・最低限のラインが必要で、それがまさに人権意識なのだと思います。(3)合理的な思考が背景にある大らかさ。あまりにも色々な人がいるので細かいことは気にしてられないというのが現実だと思います。何か起こった時は「要はなんなのか？」を合理的に考えて解決

を導く方法が共有されやすいのかもしれませんが。(4)教会の文化に基づいた寄付や社会貢献の精神。これが福祉サービスの基本になっているような気がします。多くのことがボランティアでまわっており、またボランティアもそれなりの仕事として認められています。(5)長くない労働時間。日本と比べて友達や家族との時間を持てる人が多いように感じます。519でのボランティア説明会が平日の五時半からだったのですが、五十人以上の人が出席してい

たのには驚きました。ボランティアに参加できることは、仕事以外にも何かする余裕が時間的にも体力的にもあるということ。また、なぜ三〇年以上も活発なLGBTコミュニティが継続するのかというと、毎週の会合やボランティアも含めコミュニティ活動が生活に入り込んでいて暮らしの一部になっているからだと思います。日本ではゲイバーにたまに飲みに行くなど、普段の暮らしとLGBTとしての活動が断絶されがちです。

人権面について

次に、参考になるかもしれない点を入権面・コミュニティ活動面・人生面の三つの分野に分けてあげてみたいと思います。まず人権面では、(1)思い込まないで聞く。自分勝手に「思いやり」

だと思つてやったことが相手にとって是不快なこともあります。相手が望んでいることは「聞かない限りわからない」と思つた方がいいと思います。(2)事の本質を見極める(合理的に考える)。日本だと様々なしがらみ/上下関係/組織のルール・暗黙の了解/恥意識/他人にどう思われているか等々があるのが難しいと思います。しかし何か起こった時、この問題の要点はなんなのか?人権的にOKなのかどうなのか?を合理的に考えることが時には必要です。(3)親しき仲にも礼儀あり(他人との境界線を知る)。家族であろうと恋人であろうと、境界線を知つて守るとするのが身近な人権の尊重ではないかと思います。日本では「あなたのため」などと言つて境界線を踏み越え

たりあやふやにしてくる人が多いと思いますが、不可解なことは言葉にして確認していきましょう。(4)基本的人権を学ぶ。LGBTと言えば差別されない権利がすぐに頭に浮かびますが、その他の基本的人権、生きる権利、学ぶ権利、働く権利等そういったものをきつちり頭に叩き込むというのは大事だと思えます。特にLGBTやその他の個別の権利運動をする場合、基本的人権を基盤に考えて展開していった方が説得力のある話ができると思います。(5)複合的な問題を学ぶ(他の問題との繋がりを強める)。LGBTと労働問題、LGBTと障害者差別など既に様々な問題が絡み合っています。労働や障害の分野で活動してきた人たちに学んだり、逆にLGBTの視点を持ってもらつよう働きかけることで、

関係を作っていくことが具体的な問題の解決にも繋がると思います。

コミュニティ内活動面について

次にコミュニティ内活動面では、(1) 交通費の支給を考える。会合に行くことが必要とされるのかわからないです。むしろ交通費の支給を考えた方が喜ばれるような気がしています。(2) お客様から主体へ。どうしてもサークル等を運営していると「もてなす側」と「もてなされる側」になってしまいがちです。しかしもしもっと参加者が主体的な関わりをしてくれたら、コミュニティ自体の雰囲気も変わってくるのではないかと思います。メリットや具体的目標金額を明確にして寄付を募るのもよいと思います。(3)暮らしに根



パレードのボランティア感謝パーティーにて記念撮影。真ん中が筆者。

付いた集まりを増やす。例えばアート系ワークショップを自由な発想を育てる場として、また若者を呼び込むために定期的に開く。世代別の課題への取り組みもしつつ、世代間の繋がりを作るような企画もする。LGBTは子どもがいないと言われていますが高齢者のLGBTと一〇代のLGBTは繋がるかもしれない。またお店や団体を活用し合ってネットワークを濃厚にしていくことは、イベントがしやすい環境、ひいてはLGBTであることと日常生活を断絶させなくてすむ場を増やすことでもあると思います。(4) 研究と宣伝を上手にする。何かプロジェクトをする時にLGBTの研究者・院生を雇うか協力してもらい、それについて学術的な論理づけのある論文を書いてもらい、それを実績として助成金を

集める時の資料にしたり、団体を社会にアピールする時の宣伝として活用していくことも大事です。(5) 記録し、資料を保管する。記録して歴史を作っていくことは、自分たちが生きた証にもなるし、その歴史が積み重なることで文化が形成されていきます。若者が歴史を学ぶことによって次の新しいステップにコミュニティが発展していけます。記録しない、歴史を残さないということは同じ間違えや同じ議論を繰り返してしまうということで、コミュニティの厚みがなかなかできていきません。

人生面について

最後に、人生面では、(1) 自分のことをわかって好きなことをちゃんとする。お金は持ってなさそうだけど幸せ

そうな人をよく見かけます。それは好きなことをちゃんとしていたり、安心してきて頼れる人間関係の中で暮らして

いるからかもしれません。(2) 労働時間を考えて自分の好きなことをできる時間を確保する。お金の心配が尽きませんが、お金がなぜ必要なのかを考えるとそれを補う解決策を検討できるかもしれません。(3) ただ自分の人生を楽しむ。日本にいと様々な面で「しなればいけない」や「ししてはいけない」など、そういう足枷あしかぎを感じることも多かったのですが、カナダに来ると本当にそれぞれの人が自由に暮らしているのを感じます。「それぞれが好きなことをする」というのが日本ではちょっと悪い響きに聞こえますが、でも結局それぞれの望みというのは「休みがほしい」「家族や友だちと過ごしたい」「信頼できる人間関係がほしい」「自由に生きたい」等、そういうことだと思います。そのために何が必要かとい

うと、お互い尊重できて安心できる関係性、つまり人権の問題を考え直したり、労働時間を見直したりすることで、大義名分のために何か立派なことを成し遂げようとするよりも、本当にそれぞれが望むことのために、まず自分のことを着実にを行う方が社会はマシになるのかもしれないと感じています。

カナダも問題山積で決してバラダイスではありませんが、面白いのは確かです。今後も文化背景や価値観の違いについて考えていきたいです。ありがとうございました。

(おわり)

(しおやす・つくも)